

四、婦人の学習会、女性史研究

奥田和美

一九七〇年代に入り高度経済成長の進展とともに、女性の職場進出、社会参加が増加し始めた。一九五〇年代から六一年にかけて、主婦の生きがいや主婦の労働の評価をめぐって展開された主婦論争に先駆的に見られたことがらではあったが、より一層多数の女性が社会に出たことよって女性をとりまくいろいろな問題点が、さらに広範囲にわたって取り沙汰されるようになり、七〇年代初頭には女性史論争や第三次主婦論争が繰り上げられた。ここには労働者になった、あるいはなるかもしれない、もしくははなりたい女性たちが、より人間らしく解放されたいと願った時、直面した様々の社会的、経済的矛盾をどう処理して行くかの試行錯誤の途すじが示されている。一九七五年には「国連婦人の十年」が開幕し、国際的にも女性の問題が人類の幸福実現にとって避けて通れない課題であることが明確になった。資本主義国では平等が、社会主義諸国では平和が、そして第二世界の国々では発展の問題が女性解放と結びついて議論され、かつての女性史論争にみられた様々な「解放史」か「生活史」かという狭い枠が現実によって取り払われてしまった感がある。「生活者」としての真の婦人解放を模索する中で、必然的に子供の教育問題、老人福祉問題などが、婦人問題や女性史にリンクしていくこ

とが認識されてきている。人類の半分を担う女性がちりに動くかによって、どの様にエネルギーを使うのかによって、人類の未来が決定するのではないかと女性自身も自負し、また政府や自治体も「女性の活力」に期待を寄せている。

神奈川県では一九八二年に「神奈川県女性プラン」が発足し、自治体レベルでの女性の参加の問題をめぐって様々な提案が行なわれている。また、社会教育の場でも、婦人問題、女性史が取り上げられることが八〇年前後に多くなり、地域史研究とどう結びつくのか、つかないのか、興味の持たれるところである。

さて、神奈川県内の女性の学習会、サークル活動が趣味やリクリエーション中心であることは当然だが、自治体主催の社会教育をきっかけに婦人問題、女性史を学習するグループも増えつつあるようである。第三回、第四回の「女性史のつどい」報告集所載の名簿などで神奈川県下でのグループをひろってみると、二十二の会が確認できる。その内のいくつかのグループをここで紹介してみよう。

グループ江藍（川崎市） 一九八二年発足。

会員一八名。婦人総合センター県民アカデミー受講者がメンバー。神奈川県女性史年表作成中。

日本女性史研究会よこはま（横浜市） 一九七九年、三〇名でスタート。一九八三年より一五名。成人学級「『女大学』を読む会」の受講者。学習会月一回。講師による講義など。

保土ヶ谷女性史セミナー（横浜市） 一九八一年ごろ結成。四、五名。一〇名の参加者、四、五〇代が中心。社会教育「『女大学』を読む会」の受講者が中心メンバー。中央公論『日本の歴史』で学習中。

神奈川県婦人運動史研究会（横浜市） 一九八〇年結成。一一名。全員働く女性。年表、新聞記事索引、聞き書き調査など実施。会報『神奈川の婦人』

茅ヶ崎女の未来を考える会（茅ヶ崎市） 一九八二年。市の教育講座「女性史」受講者で結成。学習会月一回。『女大学』など。

横須賀女性史研究会（横須賀市） 一九八一年。三〇〜七〇代から勉強会実施。地域の古老の聞き取りも行なう。

これらは一部の紹介にすぎないが、その他に地区の図書館を中心にした読書会でも女性史を取り上げるグループもあり、また特定の講師の先生を囲む会などもある様である。いづれにしても、これらの学習会、グループの活動形態などを見ると、公民館や図書館を足場にした地域密着型であることがわかる。このことは、身近なところでしかもお金をかけずに、活動のできる場があるということが女性の学習会、女性史研究にとっていかに重要であることを示すものであろう。しかし、さらに重要なことは、『女大学』に端的にあらわれている様に、学習会の内容が女性の「生き方論」に結びついていることである。活動の形態は地域密着型だが、学習の内容は地域そのものでなく、婦人問題や生き方に方向を見いだすための歴史の学習などがある。

京浜歴史科学研究会に主婦の参加が少ないのは、理由のないことではない。地域に密着している人が必ずしも地域史をやるとは限らない。又、生活区域はみな異なるという集団が地域史をやるうとしている例もある。女性の生き方論をさぐっていったら地域の問題にぶつかった、というようにならないと女性の参加はむずかしいだろう。逆に、地域史の問題から人の生き方をどう刺激できるか、ということも考えねばなるまい。地域史にせよ、女性史にせよ、従来の歴史研究の枠組を大きくはずれた分野でどれだけ豊かな歴史認識を育てることができるか、課題は大きい。（一九八七・九・三）